明解古典学習シリーズ 9

方丈記
無名抄

監修 佐伯梅友／三省堂編修所編

明解古典学習シリーズ 9

方丈記
無名抄

監修 佐伯梅友／三省堂編修所 編

三省堂

まえがき

一　このシリーズは、高等学校生徒諸君の古典学習に対して、有効かつ手ごろな参考書を提供し、古典学習の能率を高め、大学受験にも役立たせようという意図で企画されたものである。

一　このシリーズは、作品別高校古典学習シリーズ（全十二巻）を全面的に改訂し、新たに漢文をも加えて、作品を精選しなおして編修したものである。そうして、その監修の大任を、古文は佐伯梅友が、漢文は金谷治が負わされた。

一　精選した古典作品は、およそ高等学校で読まれるもので、これを二十冊にまとめた。

一　各冊の執筆は、高等学校の教壇で実際に古典を手がけておられる経験の深い先生がたに依頼し、それぞれ得意な作品についてお願いした。

一　監修者は、できるだけその責任を果たすように努めたが、さらに大学で教鞭を執っておられる先生がたに、編修と原稿の閲読校訂をお願いした。

一　古典の学習は、なんといっても古典の本文をよく読むことから始まる。通釈は本文の理解を確かめる参考だと考えて、本文を読むだけで作者の言おうとすることが理解されることを目標に、勉強してもらいたい。通釈が諸君の理解と違う場合は、どうしてそうなったかを考えることが、学力を進めるだいじな勉強であることを忘れないでほしい。

昭和四十七年十一月

監修者しるす

凡　例

本シリーズは、新学習指導要領に基づく新しい学習参考書として、古典のあらゆる学習に役立てられるように、その問題点を探り解説を加えて、古典を読解・鑑賞する力をつけれるように、鋭意編修したものである。

その内容構成は次のようなものである。

一　**概　説**　各巻に採録されたそれぞれの作品の内容のあらましを、文学史の面からあるいは社会的、文化的な背景から、簡略に述べたものであるが、さらに本書での採り上げ方を示したものもある。作品によってはその解説を詳しく〔付録〕で述べたものもある。

一　〔**梗　概**〕本文によっては、一つの文章を㈠㈡……といくつかの段落に分けて学習の便を図ったが、その場合に、それらを通しての文章全体のあらましを簡略にまとめたものである。

一　**本　文**　本文のまとまりごとに見出しをつけたが、長いものについては、さらにその中を㈠㈡……と分けて、読解の便を図った。なお、本文は信頼に足る原典によったが、表記は教科書に見られる現代語表記に従って改めた。

一　**通釈**　口語釈はできるだけ直訳を旨とし、本文にない補いの語句はだいたい（　）でくくるようにした。学習に際しては、（　）の語句を除いた通釈を試み、そのあとで補い語句を補ってみるようにするとよい。

一　▼〔注意点〕　文章の読解を確実にするうえに、留意しなければならない語句や文法・表現上の問題点を個々の文章から探り出して、考えさせ注意させるようにしたものである。解答は付していないが、〔通釈〕、〔語釈と語法〕または〔語釈〕〔句法〕、〔解説〕などを見ればわかるように配慮してある。

一　**読み方**　漢文の作品には、いわゆる書き下し文を示した。できるだけ原文に即した形を旨としたが、「也」「而已矣」なども漢字にふりがなという形を取った。なお、ふりがなは現代語表記によった。

一　**要　旨**　取り上げた本文の区切りごとに、その内容のあらましを示したものである。なお、作品によっては**大意**を置いたものもある。

一　**語釈と語法**　読解に不可欠と思われる語句を取り上げて、語釈や語法の上から細かく説明し、また解釈に問題のある

語句については、他の学説なども取り入れて、解釈上の便を図っている。なお本文には注番号をつけ、その順番に従って解説してある。また、漢文の場合には、**語釈**としたほか、別に**句法**を設けて、本文中に現われた重要な句形を取り上げ、できるだけ一般的に応用できる形で示した。

一 **研究** 各本文には適宜問題を置いて、文章全体にわたる内容上、文法上の事がらを、答えを通して総合的に把握できるようにしてある。設問には〔解答〕を置いてある。先にあげた▼印の注意点と合わせ学習することによって、あらゆる問題に対処できるものである。

一 **解説** 本文ごとに解説を設け、内容や表現などに関して、読解・鑑賞するうえの要点を中心に、簡潔に解説したものである。さらに必要に応じて、歴史的・社会的背景などについて、また参考的な補説を加えた。この解説は、作品を単なる知的理解に終わることなく、豊かに味わう手がかりを与えるものである。

一 **付録** 作品によっては、作品解説・関係年表・参考図などを巻末に載せて、学習の便を図った。

本シリーズの編修協力者

東京教育大学助教授　桑原博史
茨城大学助教授　島田良二
お茶の水女子大学教授　堤精二
愛媛大学助教授　長谷川孝士
宮城教育大学助教授　小野四平
早稲田大学助教授　松浦友久

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

■本シリーズ（全二十巻）の書名、および執筆者は次のとおりである。

1 万葉集・古今集・新古今集　登米高校　島原　信義
2 竹取物語・土佐日記・伊勢物語　千葉高校　坂本　哲郎
3 枕草子　岡山大安寺高校　高田　哲夫
4 源氏物語　上　独協高校　神田　直人
5 源氏物語　下　橘高校　小森　盛雄
6 更級日記　松山愛光学園　越智　聰
7 今昔物語集・宇治拾遺物語　浦和高校　田辺　秀夫
8 大鏡・今鏡・増鏡　修猷館高校　中村太次郎
9 方丈記・無名抄　上田高校　新津　治通
10 平家物語　九段高校　田所　寛行
11 徒然草　藤枝東高校　萩原　昌明
12 おくのほそ道　大谷学園　桜井武次郎
13 芭蕉・蕪村・一茶　川崎高校　松尾　勝郎
14 西鶴・秋成　米原高校　小堀　誓勝
15 謡曲・狂言・浄瑠璃　白鷗高校　影山美知子　齊藤　貞博
16 論語・孟子　仙台第一高校　千葉　仁
17 老子・荘子　三田高校　青木木菟哉
18 史記・十八史略　追手門学院　神楽岡昌俊
19 漢詩　夕陽丘高校　中津濱　渉
20 文章軌範・古文真宝・唐宋八家文　修猷館高校　藪　敏也

概説

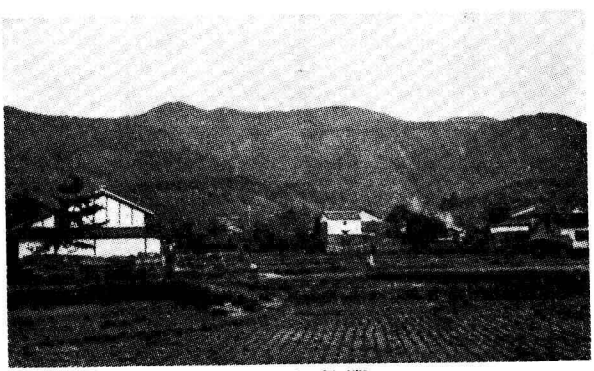
「方丈記」は、「枕草子」「徒然草」とともに古典の三大随筆とされている。しかし、それら二書とは大きく異なり、きわめて首尾一貫した構想と主題とによって書かれている。すなわち、作者鴨長明が六十歳の晩年に、日野外山の「方丈の庵」に住んで、おのが生涯を静かに振り返って書いた回想録であるが、同時に人生評論の書であり、人生いかに生くべきかを問うている書である。

その構成は、いくつかの天災・異変の悲惨事を客観的に描いて、この世の住みにくさを強調した前半と、作者のおいたち、遁世への経緯、草庵の生活を通じて、無常の世にいかに処すべきかの信条を述べた後半とに大きく分けられる。

〔前半〕

序――主題である「人生の無常」を巧みな比喩と対句とによって簡潔に印象深く述べる。

㈠世の不思議――作者が六十歳までの生涯に体験した五つの天



日　野　山（左端）

災・異変、すなわち、

○都の三分の一を焼き尽くした「安元の大火」、

○家の内の資財がすべて空にあがってしまった「治承の旋風」、

○世人の嘆きと不安とをよそに清盛によって強行された突然の福原への「治承の遷都」、

○二か月の間に都の中で四万二千三百余の死者を数えた「養和の飢饉」、

○空にでも逃げる以外には行き所もなかった「元暦の地震」、

によって、序の人生無常の姿を具体的に示す。

㈡処世の不安――しかし、この世の生きにくさは、㈠に限ったことではない。それは、住む場所・身分・経済・人間関係などの、日常生活のすべてにわたるものであり、ここに、「人生いかに生くべきか」の問題があるという。

〔後半〕

㈠大原山の遁世――ここで筆を転じ、六十年間の作者自身の生涯を回想する。

作者は若くして父を失い、祖母から伝えていた大きな家を人に譲り、その後も、出世の望みはかなわず、五十歳の春に、ついに、大原山に出家遁世した。

㈡日野山の閑居――さらに、六十歳を迎えて、作者は日野山の奥に「方丈の庵」を結んだ。四季の自然の情趣、心のままの念仏、和歌・管絃の風雅、勝地・仏寺・旧跡への遊行、山中の庵の夜の思いと、まことに趣深く、気ままな草庵の日々である。

㈢閑居の気味――方丈の庵に、もちろん妻子も友も奴婢もなく、衣食また今昔の感に耐えぬ粗末さではあるが、この俗塵を離れた自由気ままの中にこそ、心の安らぎ、心の楽しみはあり、しかも、この「気味」は住まない者にはわからないと誇示する。

結び――早暁の念仏――しかし、静かな暁に、作者は老境の余命を思い、草庵と閑寂とに執着する自分を思う。その時、作者は、嘆美してきた閑居の生活にも、ついに安住し得てはいない自己自身に逢着して、「進退窮まったまま」筆をおく。

今日の私たちの関心は、簡潔にして巧みな文に綴られた「序」および「世の不思議」と、生身の人間としての苦悩をまさざまに投げ出している「結び」とに深いであろう。作者の執筆の意図は、「日野山の閑居」や「閑居の気味」にあったろうと思われるが。

鴨長明像

この作品の基盤には、㈠平安時代から鎌倉時代へ、すなわち、王朝貴族階層の没落と新興武士階層の興隆という大きな社会の変動と、㈡当時の思想界を支配した仏教の末法思想と、㈢下級貴族の一員として、相応な出世を望みながら同族にむなしく阻まれ、出家して西方済度を願いながらなお王朝文化生活への憧れが捨て切れなかった作者の現実とがある。これらのことを思い合わせながらこの作品を読むとき、「方丈記」は、単に閑寂を愛し隠遁を楽しんだだけの中世隠者の、悟り澄ました作品などとしてではな

く、むしろ、隠者ならざるを得なかったがゆえに、胸底には激しい情熱をひそめ、悟ろうとして悟り得なかった一個の人間のすぐれた人生の記録として、私たちによみがえって来るのではなかろうか。

「無名抄」は、鴨長明によって、「方丈記」より前に書かれた歌論書である。長短約八十段の歌論・歌話・歌人逸話を収めている。

いわゆる歌学知識の集録ではなく、「正徹物語」と並んで、説話的・随筆的歌論書の双璧をなし、その点、「歌論」といっても、親しみやすいものがある。「徒然草」にも引用されて著名な、登蓮法師のますほの薄のこと、作歌の心労のために夭折したと言われる宮内卿の話、長明の琵琶の師であり、和歌の師でもあった中原有安の教訓、長明の和歌の師、源俊恵の教訓など。

また、その歌論としての和歌への主張は、師俊恵の見解と、それを受け継ぐ長明自身の考えとが主であるが、長明の論は、藤原俊成の歌論の影響も多く受けている。俊成と俊恵との対立を鮮やかに伝える、俊成の自讃の歌のこと、俊恵の主張を端的に示す、俊恵が歌体を定むること、あるいは、和歌の歴史的変遷を語り、当時の歌壇の形勢を伝え、余情に立脚する長明の幽玄論を述べた、近代の歌体のこと、などが注目される。

ここには、そのうち、十の段を採った。

本文は、ともに「日本古典文学大系」の「方丈記　徒然草」と「歌論集」とによった。

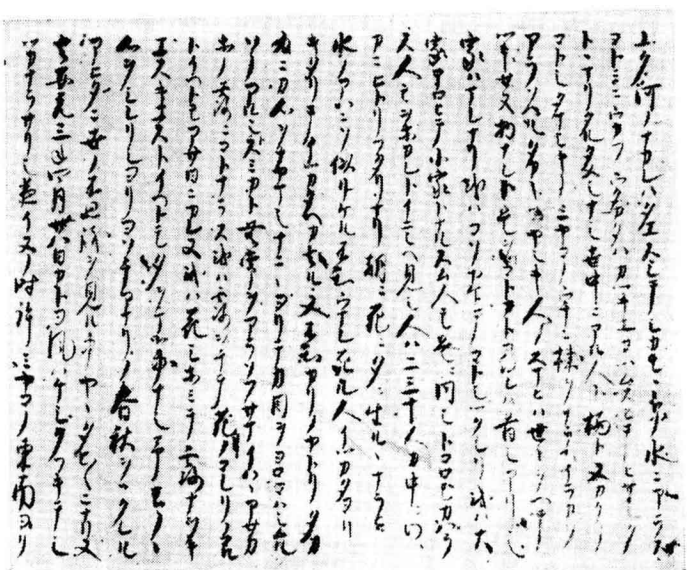
目次

方丈記……1
序……2
㈠行く川の流れは絶えずして……2
㈡知らず、生まれ死ぬる人……7
世の不思議……10
安元の大火……10
㈠予、ものの心を知れりしより……10
㈡吹き迷ふ風に、とかく移りゆくほどに……14
治承の旋風……18
また、治承四年卯月のころ……18
治承の遷都……23
㈠また、治承四年水無月のころ……23
㈡その時おのづから事のたよりありて……27
㈢世の乱るる瑞相とか聞けるもしるく……31
養和の飢饉……35
㈠また、養和のころとか、久しくなりて覚えず……35
㈡前の年、かくのごとくからうじて暮れぬ……40
㈢あやしきしづ山がつも力尽きて……43
㈣仁和寺に隆暁法印といふ人……47
元暦の地震……51
㈠また、同じころかとよ、おびたたしく……51
㈡かく、おびたたしくふることは……55
処世の不安……58
㈠すべて世の中のありにくく……58
㈡また、勢ひある者は貪欲深く……63
大原山の遁世……67
わが身、父かたの祖母の家を伝へて……67
日野山の閑居……72
㈠ここに、六十の露消えがたに及びて……72
㈡今、日野山の奥に跡を隠してのち……75
㈢その所のさまを言はば……78
㈣また、ふもとに一つの柴の庵あり……86
㈤もし、夜静かなれば……91
閑居の気味……95
㈠おほかた、この所に住み始めし時は……95

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

㈡すべて世の人の住みかを造る習ひ……99
㈢いかが奴婢とするとならば……103
㈣それ、三界はただ心一つなり……109
早暁の念仏……113
そもそも、一期の月影かたぶきて……113
無名抄……119
続けがら善し悪しのこと……120
歌はただ同じことばなれども……120
歌仙を立つべからざるの教訓のこと……126
㈠同じ人、常に教へていはく……126
㈡さて何事をも好むほどに……129
ますほのすすきのこと……133
㈠雨の降りける日、ある人のもとに……133
㈡このこと、第三代の弟子にて……138
静縁のこけ歌のこと……141
静縁法師、自らが歌を語りていはく……141
歌人は証得すべからざるのこと……146
俊恵に和歌の師弟の契り結びはべりし初め……146
近年の会の狼藉なること……151
このごろの人々の会に連なりて見れば……151
俊成の自讃の歌のこと……155
俊恵いはく、「五条三位入道のもとに……155
俊成卿女と宮内卿と両人の歌のよみやう変はること……162
今のみ代には、俊成卿女と聞こゆる人……167
近代の歌体のこと……167
㈠ある人問ひていはく、「このごろの人の……167
㈡すべて歌のさま、代々に異なり……170
㈢歌の昔より伝はりきたれるやう……174
㈣しかれども、真には志は一なれば……178
㈤問ひていはく、「事の趣は……181
㈥たとへば、秋の夕暮れ空の気色は……183
㈦すべて志ことばに現はれて……187
俊恵が歌体を定むること……190
㈠俊恵いはく、「世の常のよき歌は……190
㈡またいはく、「匡房卿の歌に……194
付録……200
作者・作品解説……200
鴨長明年譜……208
大内裏略図……212

方丈記



大福光寺本「方丈記」より

序

❶ 行く①川の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。②淀(よど)みに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。世③の中にある人と住みかと、またかくのごとし。

④玉敷きの都の内に、⑤棟(むね)を並べ、いらかを争へる、⑥高き、卑しき人の住まひは、世々を経て尽⑦きせぬものなれど、⑧これをまことかと⑨尋ぬれば、昔ありし家はまれなり。⑩あるいは、⑪こぞ焼けて、ことし造れり。あるいは、大家(おほいへ)滅びて、小家(こいへ)となる。住む人⑫もこれに同じ。所も変はらず、人も多かれど、いにしへ見し人は、二、三十人がうちに、わづかにひとりふたりなり。⑬朝(あした)に死に、夕べに生まるる習ひ、ただ⑭水のあわにぞ似たりける。

▼「淀み」「うたかた」「玉敷きの」「こぞ」「習ひ」の意味を明らかにせよ。

▼「これをまことかと」「住む人もこれに同じ」の「これ」は

通釈 ゆく川の流れは絶えることなく、それでいて、（その水は）もとの水ではない。流れの静かに淀んだ所に浮かぶ水のあわは、消えたかと思うとでき、できたかと思うと消えて、いつまでもそのままの状態でいるためしはない。この世の中に生きる人と、（この世の中にある）住まいとが、また（ちょうど）このようである。

美しい都の中に、（ぎっしり立ち並んで）棟を並べ、いらかを争っている、身分の高い人の住まい、（あるいは）身分の低い人の住まいは、幾代も続いて絶えないものであるが、これを（果たして）ほんとうかと思って調べてみると、（実際は）昔あった家はほとんどない。ある場合は去年焼けて、ことし（新しく）造っている。また、ある場合は大きな家が滅んで小さな家になる。住んでいる人もまたこれと同じことである。場所も（昔に）変わらず、人も（昔どおりに）多いけれ

それぞれ何をさすか。
▼「かつ消え、かつ結びて」「…似たりける」の傍線部の語の用法、意味を考えよ。
▼「棟を並べ、いらかを争へる、高き、卑しき人の住まひは」の傍線部の語はそれぞれどの語に係るか。
▼「尽きせぬもの」と「尽きぬもの」との違いについて考えよ。

要旨　行く川の流れとそこに消え結ぶ水の泡とに、人と住まいとのはかなさをたとえ、都の中の家と人とにこれを敷延して、「無常」こそ人生の真実の姿であるという。

語釈と語法

①ゆく川の流れは…もとの水にあらず　流れて行く川の流れは絶えることなく、それでいて（その水は）もとの水ではない。「して」は、順接の接続助詞で漢文訓読に多く用いられ、「しかも」は、「それでいて」の意の接続詞。この続けた形は、漢文訓読体の強調表現である。○この有名な冒頭の出典（表現のもとになった書物）を示した最初は「十訓抄」（「方丈記」より約四十年後に成立した、教訓的説話集）であり、「方丈記」とて、かなにて書き置けるものを見れば、初めのことばに、行く川の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらずとあるこそ、川閲レ水以成レ川。水沼沼而日度。世閲レ人而為レ世。人冉冉而行暮。（川は水を集めて川を作っている。ところが、その水は勢いよく一日じゅう流れて、次から次へと去って行く。この世は、ひとりひとりの人間を集めて世の中を作っている。ところが、その人々はどんどん年を取り、やがて死んで行ってしまう。）といふ文を書けるよと覚えて、いとあはれなり。」（巻九、可レ亭二怨望一事）とある。右の古詩は「文選」（中国の梁の昭明太子撰の詩文集）巻四に載っている陸士衡の「歎逝賦」の一節である。「十訓抄」以後の古注では、なお出典を探って、あるいは山岡元隣の「首書方丈記」（江戸、明暦四年（一六五八）刊）は「論語」子罕篇の「子、在二川上一曰、逝者如レ斯、不レ舎二昼夜一。」（孔子はあるとき、川のほとりに立って、流れ去る水面を見つめながら、「すべて過ぎ去り行くものは、この流れ行く川の水と同じだ、夜昼の区別なく少しもとどまることがない。」と言って嘆息した。）をあげ、槙島昭武の「方丈記流水抄」（江戸、享保四年（一七一九）刊）は、「維摩経方便品」の「水の性は住せず。ただし、池沼方円これを碍ぐれば、すなはち住す。性の住するにあらざるなり。人もまたかくのごとし。」をあげ、唐代の詩人戴叔倫の詩句「沉湘日夜東流去、不下為二愁人一住。少時応レ到二海東一。」をあげ、さらに「文選」巻二十七の長賦行「百川東二到レ海一、何時赤帰レ西。」をもあげている。冒頭の文とこれらの出典との間には思想的に共通したものがある。しかし、「歎逝賦」など非常に近い内容を持っているが、なお、長明はこれらの出典のどれか一つ、あるいは二つから冒頭の文を思いついたと言い切ることは、（自分が）昔見知った人は、二、三十人の中に、わずかに（今は）ひとりふたりである。（一方では）朝に死んでゆき、（かと思うと、一方では）夕べに生まれてくる、この人間世界の姿は、ただもう（消えては結ぶ）水のあわに似ていることだ。

とはできない。

②淀みに浮かぶうたかたは…とどまりたるためしなし　流れの静かに淀んだ所に浮かぶ水のあわは、消えたかと思うとでき、できたかと思うと消えて、いつまでもそのままの状態でいるためしはない。「淀み」は、水のほとんど流れずじっとしているところ。動詞「淀む」の連用形が転じた名詞。「うたかた」は、水の上に浮くあわ。人間あるいは人の世のはかなさ、無常なものの例としてよく用いられる。「かつ…かつ…」は、二つの相異なる動作が同時に並び行なわれる意味を表わす副詞。○この文の出典としては、「流水抄」が「維摩経方便品」の十喩の「この身は聚沫の撮摩すべからざるがごとき者なり。水流衝撃し、因つて聚沫を成す。一たび往けば有なるに似て、これを撮ればすなはち無し。この身もまたしかるなり。」（この身は、水しぶきが手にすくうことのできないのと同じようなものだ。水の流れがぶつかり合って水しぶきとなる。水しぶきができた時には、その水しぶきは姿があるようだが、これを手にすくおうとすると、まるですくえない。この身もまた、このようなものである。）をあげ、「この身泡の如し、久しく立つることを得ず。」とあり、十喩の意を詠じた「千載集」巻十九の藤原公任の釈教歌（仏教を題材とした歌）「ここに消えかしこに結ぶ水のあわの浮き世にめぐる身にこそありけれ」に注意している。これも①の語釈で述べたとおり、本文と出典との関係は、両者が非常によく似た表現・内容であっても、にわかにこれこそが出典とは断じがたい。

③世の中にある人と住みかと、またかくのごとし　この世の中に生きる人と、この世の中にある住まいとが、またちょうどこのようである。「世の中にある」は、「人と」「住みかと」が対句をなすので、当然両方に係って、世の中にある人と世の中にある住みかとの意になる。「かくのごとし」は、これも前の二文「行く川の流れは…もとの水にあらず」と「淀みに浮かぶうたかたは…とどまりたるためしなし」とが大きく対句をなす関係から、「かく」がその両方をさすことになり、「この世に生きる人も、この世にある住まいも、ともに、ちょうど、流れ行く川の水、淀みに浮かぶうたかたと全く同じで、はかなく無常なものなのだ」の意である。したがってここでの比喩関係（「ごとし」を用いた直喩であるが）を「住みか」が「淀み」に、「人」が「うたかた」に分けて比喩されていると考えるべきではない。「また」は、同じように、の意で副詞。「かく」は、このように、の意の副詞。「さ」「しか」などとともに指示副詞とも言われるが、文脈中のどの部分をさすかに注意しなければならない。

④玉敷きの　玉を敷いたように美しい。枕詞ふうに「都」にかけた連体修飾語。

⑤棟を並べ、いらかを争へる　大小さまざまの家が、お互いの屋根の高低を競い合うかのように、ぎっしりと立ち並んでいる様子。下の「住まひ」に係る修飾語。○「棟を並ぶる住まひ、いらかを争へる住まひ」を簡潔にした漢文的表現で、以下このような形の対句表現（対偶中止法）がきわめて多い。「棟」は、棟木のことであるが、ここでは広く屋根の意味に使われている。「いらか」は、甍。屋根にふいたかわらであるが、ここでは、かわらぶきの屋根の意。かわらは最初寺院の屋根にふかれたので、かわら屋といえば寺を意味したが、この当時も一般の民家は板ぶきであり、かわらぶきはりっぱな建築だけに限られていた。「る」は、ている、の意で、状態の存続を表わす助動詞「り」の連体形。

⑥高き、卑しき　身分の高い、あるいは身

分の低い、の意。「高き」「卑しき」は、対等の関係でともに「人の住まひ」を修飾する。「人の住まひ」は、これで一単語。

⑦**尽きせぬ**　サ変動詞「尽きす」の未然形「尽きせ」に、打消の助動詞「ぬ」の添ったもので、「尽きぬ」を強めた言い方。

⑧**これ**　「都の内にひしめき競う住まいが、幾代も幾代も経ってなおなくなり変わることがないかのようであること」をさす。

⑨**まことかと尋ぬれば**　ほんとうに幾代も幾代も続いて絶えないのかなと思って調べてみると。「まことか」は、ほんとうか、といった気持ち。「尋ぬれ」はナ行下二の已然形、「調べる」の意。

⑩**あるいは**　ある場合は。「あるいは…あるいは…」と重ねて使うことが多い。副詞。漢文訓読調。

⑪**こぞ**　去年。下の「ことし」と対をなす。

⑫**これ**　前述の「家」のありさま、「昔ありし家…小家となる」をさす。

⑬**朝に死に、夕べに生まるる習ひ**　一方では死んでゆく人があるかと思うと、また一方では生まれてくる人もいる、この人間世界の姿は。「朝」「夕べ」は「死」「生」を対立強調させた表現で、時間的に特に朝と夕とに限定したものではない。現代の感覚では「朝に生まれ、夕べに死ぬる」と「生」を先に述べるが普通のようにも思われるが、前出の「かつ消え、かつ結びて」に照応させたのであろう。「消え」「結び」の先後は単に語調を整えた結果にすぎないかもしれないが、そして、このあとすぐに、「知らず、生まれ死ぬる人」と「生」を先に述べてもいるが、なお、死滅を先にし、生成をあとにしたこれらの表現には、その逆よりも、はかなく無常の気味がいっそう濃いように思われる。「習ひ」は、世の習わし、世の真実の姿。

⑭**ただ**　まるで、そっくりそのまま、の意の副詞。「似たりける」を修飾する。

⑮**ける**　詠嘆の助動詞「けり」の連体形、上の係助詞「ぞ」の結び。○ここまで書き進めて来て、あらためて、無常な世の中、人の姿を思って詠嘆しているのである。「ただ」「ぞ」「ける」によって人間存在が水のあわにまったくよく似ていることを強調し詠嘆する。

研究　一　「世の中にある人と住みかと、またかくのごとし。」の傍線部は、具体的には何がどうだというのか。

二　「行く川の…かくのごとし。」の④文脈構成を整理せよ。目立つ修辞の特色は何か。㋺この冒頭部が古来人口に膾炙されてきた理由について考えよ。

三　「玉敷きの…」以下の文章で、互いに対句をなしている部分をすべてあげよ。

四　「方丈記」一編を貫く思想は仏教の無常観であると言われるが、「無常」とはいかなる状態のことか。また、文中の④「うたかた」㋺「住まひ」㋩「人」について述べているところから、端的にそれを思わせる表現をそれぞれ指摘せよ。

（解答）　一　「世の中」が「行く川の流れ」に、「人」が「うたかた」に、「住みか」が「淀み」に、それぞれたとえられている、と考えるのが一般的でわかりやすいが、正しくは、〔語釈と語法〕の③に述べたように考えるべきであろう。二〔解説〕参照。三〔解説〕参照。四「無常」とは、宇宙一切の万物は生滅・変転して、常に変わっており、永久不変の物は何一つないことをいう。④　かつ消え、かつ結びて、㋺　こぞ焼けて、ことし造れり。大家滅びて、小家となる。㋩　朝に死に、夕べに生まるる習ひ。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo